

日本産チョウのなかには雌雄でその羽の模様が異なる種はいくつかあるが、メスグロヒョウモンほど違いのあるチョウはいない。現に、江崎悌三校閲・横山光夫著「原色日本蝶類図鑑（1954）」に古くはこの雌雄が別の種とさえ誤認されていたという記述があり、実際いつ同一種だと確認されたのか知りたいところだ。オレンジ色の♂と黒い模様の♀との交尾が観察されて最終確認に至ったであろうことが容易に推定できるが、その第一発見者の興奮度合いは相当のものだったと思われる。調べればその報告論文がどこかにあるはずだが、手元にあるどの図鑑も歴史的証明事実には触れてくれていない。

上記横山図鑑は、栗の花上に入り乱れて飛来するのは美しい、と記述しながらも、北海道から九州まで広く分布するがあまり個体数は多くないと結論し、最近の図鑑類もおしなべて、本種はどの



May 30 1971 高知物部村岡の内
leg. M. Shimazaki

の産地でも個体数が多くはない、としている。それでも、食草など生息環境がいいのか、加古川市志方町には本種がかなり密度濃く発生する地域がある。筆者は中学時代に高知大豊郡梶が森の中腹で、白いウツギの花蜜を求めて群れるアカタテハやミドリヒョウモンに混じる本種の雌雄、兩個体との初の出会いを一気に果たしているが、高知市内ではめったに見ることができないチョウで、手元に残る標本は、僻地教育に力を注いだ亡き父の赴任地：高知県香美郡物部村岡の内小学校を家族で訪れた

際に採集した♂1個体だけである。加古川の里山・ギフチョウ・ネット代表の竹内隆さんは本種雌雄がなかよく並んで静止するみごとなツーショットの撮影記録をされ、交尾個体の観察もできたと聞くが、筆者はまだ交尾個体に出くわしたことはない。

秋風が顔に涼しい10月中旬に、加古川権現ダム湖周回道路をサイクリングした際、新鮮度の落ちた夏眠あけの本種♀が道路沿い側溝近くで日向ぼっこをしている場面に出会い、まるで産卵行動のようにもみえる動きをみせたが、目の前で産卵は確認できなかった。さらに進んだセイタカアワダチソウが咲く路傍に夢中で蜜を求める♀がいて、このときはじっくりとビデオ撮影を楽しめた。新鮮個体であれば裏面は緑色を帯



Oct. 13, 2008



Oct. 13, 2008



Oct. 13, 2008

びたきれいな模様で翅表とは明確に差がみられるが、飛び古してきた個体では、もはや翅表とほとんど同じ模様に見えてしまう。ホシミスジに本種のみが求愛飛翔で接近する様が昆虫写真家：海野和

男氏のデジタル昆虫記に公開されているが、ことほどさように♀の模様はミスジチョウ族に近似している。

参考) <http://eco.goo.ne.jp/nature/unno/diary/200507/1120534617.html>